卓越大学院プログラム現地視察報告書（令和5年度）

卓越大学院プログラム委員会

機　　関　　名	名古屋大学	整 理 番 号	１９０９
プログラム名称	情報・生命医科学コンボリューション on グローカルアライアンス卓越大学院		
プログラム責任者	門松 健治	プログラムコーディネーター	勝野 雅央

１．進捗状況概要

・東海国立大学機構を基盤として、名古屋大学と岐阜大学の強力な連携協力の下に総長・学長のリーダーシップが発揮され、本卓越大学院プログラムが起爆剤となって大学院改革が順調に進んでいる。

・「個別化医療から個別化予防へ」という本プログラムのコア概念が、３つの教育の柱である「デジタル生命医科学」「マルチレイヤー生命医科学」「国際性・多様性」実装を通して着実に実現しつつある。

・令和２年度現地視察報告書、中間評価結果（令和５年３月 13 日）の留意事項、令和４年度のＰＯフォローアップ報告書などで指摘された点を真摯に受け止め、一つひとつの課題をクリアーすることによって、本プログラムの実施・発展を当初の期待以上のものにしている。

・本プログラムに参加している学生が卓越大学院の趣旨を良く理解し、自分のキャリアパスの実現に向けて日々精進していることが明確である。

【大学院教育全体の改革への取組状況】

・未来社会創造機構などの組織作りをすることを通して、社会科学・人文科学を巻き込んだ大学院改革を実行しつつあり、いわゆる総合知をいかに大学院改革に活かすかなどを真剣に考えていて、新しい文理融合の将来像がうかがわれる。

・大学院改革において、距離的ハンディを乗り越えて名古屋大学と岐阜大学との協働が進んでいるが、２つの組織のメリットを活かしたシナジー効果が一層発揮されるよう、より効果的な対面・オンラインのコミュニケーション作りが望まれる。

・企業連携なども順調に進んでいるが、社会的課題の取り込み、本プログラムの社会実装、そしてベンチャーの立ち上げなどの面で、外部組織の力をより有効に利用することが望まれる。

２．意見（改善を要する点、実施した助言等）

・高山市などの認知症発見では本プログラムを通じた地域的社会実装が見られるが、大学が一層の体系的・戦略的サポートをすることによって、情報科学と生命医科学のコンボリューションの地域での社会実装が進展することが望まれる。

・現段階から補助期間終了後を見据え、本プログラムの内容を進化・発展させるべく、東海国立大学機構の教学・法人のガバナンス力を一層強化し、機構改革を更に進めてゆくことが望まれる。

・学生がラボと CIBoG プログラムとの間で苦労している様子がうかがわれるので、メンター制度などを活用するなど、学生の負担軽減に配慮することが望まれる。

・CIBoG のプログラムの詳細が学生に良く伝わっていないフシがあるので、最低限日程・スケジュールなどの情報供与においてはより丁寧になされることが望まれる。

・医学系以外の学生に対する CIBoG プログラムの効果が明示的に示されると良い。